

浄瑠璃・世話物

「曾根崎心中」

◎初演 元禄十六（一七〇三）年五月七日 竹本座

「この世の名残り、夜も名残り…」

あらすじ

上之巻

（観音巡りく生玉社の場）

天満屋の遊女お初が大坂三十三番の

観音巡りを終え、生玉の社に着いた。お初はここで恋人の醤油屋平野屋の手代徳兵衛を久しぶりに見かけ、その出会いを喜ぶ。実は、徳兵衛におじである平野屋久右衛門の女房の姪との結婚話が進んでいたが、お初のことがあり断る。このため、おじから持参金の返却を迫られる。徳兵衛はこの持参金を、継母から取り返すことはできたが、これを友人の油屋九平次に貸してしまう。「必ず取り返す」と徳兵衛は語る。そこへ九平次が町衆と一緒に通りかかったので、九平次の実印の押された証文を見せ、その返済を迫ると、「借りた覚えはない。証拠の証文も偽物だ」などと汚名を着せた上、徳兵衛を散々な目にあわせる。心身ともに傷ついた徳兵衛は、その場を立ち去る。



中之巻（しじみがわ 蜷川 新地天満屋の場） その夜、天満屋では

お初が昼の事件を案じていると、徳兵衛が来る。お初は縁えんの下に隠した。そこへ九平次が現れ、徳兵衛の悪口をいう。お初は縁の下の徳兵衛を足で押さえ、ひとり言になぞらえて、それとなく死の覚悟を伝え合う。深夜、二人は手を取り合って天満屋を忍び出る。

下之巻（みちゆき 道行 曾根崎天神の森の場） 曾根崎天神の森についた二人は、永遠の愛

を誓いながら、「松、棕櫚しゅうろの一木ひときの相生あいおい」にからだを結びつけ、この世に別れをつける。

見どころ 近松最初の世話浄瑠璃です。女形の人形遣いの名手辰松八郎兵衛たつまつはちろうべえがお初を遣ったことでも評判になりました。天満屋の見世先、縁の下に潜んだ徳兵衛がお初の素足に頬を寄せ、互いに死の覚悟を伝えあう「肉感的」な場面が一番の見どころです。人形の動きが真に迫っていて、見事です。現行の文楽の『曾根崎心中』は、昭和三十年に改訂復活されたものです。歌舞伎では、昭和二十八年に宇野信夫うののぶおが脚色したものが演じられています。